マリンレスキュージャーナル

Vol 109 No2
2017 | 8月号

CONTENTS

01 MRJグラビア
平成29年度日本水難救済会名誉総裁表彰式典

06 連載 マリンレスキュー紀行
海の安全安心を支えるボランティアたちの群像
福井県水難救済会　高浜水難救難所／南越前町水難救難所

12 全国地方救難所のお膝元訪問
ニッポン港グルメ食遊記【南越前町水難救難所】

13 青い羽根募金活動レポート2017
平成29年度青い羽根募金強調運動／平成28年度青い羽根募金の実績／
第三管区海上保安本部主催の「巡視船艇・航空機展示総合訓練」における青い羽根募金活動

17 水難救済思想の普及活動レポート

20 マリンレスキューレポート
Part1 救難所NEWS　海難救助訓練ほか／水難救助活動等報告／新設救難所の紹介
29 Part2 洋上救急NEWS　洋上救急活動報告／地方支部の活動状況／洋上救急慣熟訓練

35 レスキュー41～地方水難救済会の現状(シリーズ⑥)
岡山県水難救済会／香川県水難救済会

39 MRJ 互助会通信

41 MRJ フォーラム
(公社)日本水難救済会の通常理事会、定時社員総会等を開催／平成29年度青い羽根募金運営協議会を開催／中央洋上救急支援協議会第32回通常総会等を開催

46 編集後記

表紙：福井県水難救済会　高浜水難救難所

写真：福井県大飯郡高浜町の城山海水浴場内にある「明鏡洞」

連載 マリンレスキュー紀行

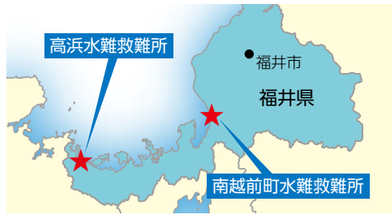
海の安全安心を支えるボランティアたちの群像

福井県水難救済会　高浜水難救難所／南越前町水難救難所

▲(左)はまなすパーク海水浴場から見た青葉山、(右：上から)夜叉ヶ池／河野漁港近くの北前船のオブジェ／定置網漁の様子

地域を愛する心で
西日本有数の美しく豊かな海を守る

取材協力：福井県水難救済会　高浜水難救難所／南越前町水難救難所



南越前町の水産資源と高浜町のレジャー産業

日本海に面し、石川県、岐阜県滋賀県、京都府に接する福井県は、約415㎞にわたる長い海岸線を有する。国内有数の透明度を誇る鷹巣海水浴場や、日本三大松原に数えられる緑豊かなビーチ気比の松原海水浴場など、日本を代表する美しい海水浴場がいくつも点在し、夏には大阪や名古屋から多くの観光客が訪れ海水浴を楽しむ。また冬は冬で、カニの王様とも称される越前がにを目当てに、越前地区には他府県ナンバーの車が目立つようになる。

今回紹介する１つ目の救難所があるのは、京都府に隣接する高浜町。町のシンボルである青葉山は、福井県と京都府にまたがり、特に福井側から見ると富士山と似た景観で“若狭富士”の別名で知られる。また、第二次世界大戦、ガダルカナル島の戦いで知られる重巡洋艦「青葉」は、この山に因んで名付けられた。

高浜町の海には、快水浴場百選（環境省選定）に選ばれた若狭和田海水浴場をはじめ、日本の夕陽百選（日本列島夕陽と朝日の郷づくり協会選定）の城山公園のある城山海水浴場などがあり、1960年代後半の海水浴ブームには、ひと夏に100万人を超える観光客が訪れ、それに合わせ500軒もの民宿が営業をしていた。高浜町はそういった観光業で栄えた背景を持ち、高浜水難救難所の救助員はレジャー関係の仕事に就いている者が多い。

一方、２つ目に紹介する救難所があるのは、福井県の中部にある南越前町。こちらは小説家泉鏡花が戯曲で扱った、龍神伝説の残る「夜叉ヶ池」や、日本海海運で名を馳せた北前船で知られる。

南越前町には、「糠」「河野」「甲楽城」の３つの漁港があり、定置網漁が盛んである。なので、南越前町水難救難所の救助員は漁業従事者が大半だ。

“レジャー”と“漁業”。産業の違う２つの地域の海を守る者たちの仕事は、それぞれの海の特性に合わせてハッキリと分かれていた。しかし、この福井の海を愛する気持ちは全く同じモノだった。

高浜水難救難所

▲城山海水浴場にて（左から秋岡武治救助長、磯部功副所長、今井勇次班長）

８つの美しい海水浴場を持つ高浜町

福井県の南西に位置する高浜町の海は美しい。全長８㎞にわたる海岸線には、「難波江海水浴場」「えびす浜パーク海水浴場」「はまなすパーク海水浴場」「若宮海水浴場」「城山海水浴場」「鳥居浜海水浴場」「白浜海水浴場」「若狭和田海水浴場」の８つの海水浴場が連なる。高度成長期においてもクリアな透明度の海水環境を維持し、古くから西日本有数の海水浴場として知られていた。同町はこの豊かな環境資源を活用し、福井県に隣接する４県をはじめ、大阪府や愛知県などの大都市圏へ積極的に臨海学校を誘致し、最大で１シーズンで100万人を超える海水浴客の獲得に成功していた。

平成28年に高浜町に訪れた海水浴客は延べ23万人、最盛期の1/4に満たない数だが、それでも全国平均で見れば、上位にランキングする集客数である。海水浴ブームが去ってからは、各海水浴場それぞれが工夫を凝らし、砂浜まで車で入れる「難波江海水浴場」、砂浜でのバーベキュー“浜ベキュー”を楽しめる「えびす浜パーク海水浴場」や「はまなすパーク海水浴場」、水上バイクなどによるオプショナルレジャーを選べる「若宮海水浴場」など、楽しみ方を細分化することで、町ぐるみで海水浴場に求められるニーズに応えてきた。

特に最近では、昨年に「若狭和田海水浴場」が国際環境認証の“ブルーフラッグ”をアジアで初めて取得（平成29年も連続取得）し、注目を浴びている。

ブルーフラッグとは

“優れたビーチ”を認定する国際環境認証。厳しく定められた４項目の（水質／環境教育と情報／環境管理／安全）33基準を満たすビーチに与えられる。「若狭和田海水浴場」には、専用のシャワーやトイレ、水陸両用車イスなど、身体に障害のある人も海水浴を楽しめる設備が整えられている。

高浜町の海を訪れる海水浴客を守る取り組み

高浜水難救難所は、野瀬豊所長（高浜町長）以下80名を超える救助員が所属し、救助船登録は15艇、それに加え専用パトロール艇も２艇装備する一大組織である。同所には４つの班が存在する。「高浜町水難救助員会班」、漁業従事者からなる「漁協班」、「マリーナ班」、ダイビングレスキューを行う「DSCC班（福井・京都地区スキューバ・ダイビング安全対策協議会）」である。

西日本有数の海水浴場を抱える高浜水難救難所に出動要請が入るのは、もちろん夏が圧倒的に多い。高浜水難救難所では平成29年度海水浴場開設期間である7/8～8/20までの44日間、「城山海水浴場」に本部を設け、毎日パトロール艇を巡回させる重点監視を行っている。土日祝日は10名以上、平日も船を操縦できる者を含め、常時３名は常駐している。この活動を執り行っているのが、今回取材した「高浜町水難救助員会班」である。

「50年程前の最盛期のお盆の時期なんかは、当時の町民の数約１万人に対し他県から入って来るのは５万人。夏と夏以外では町の風景がまったく違っていたんだ」

そう懐かしそうに語ったのは、高浜水難救難所副所長であり、「高浜町水難救助員会」の会長を務める磯部功さん。高浜町で生まれ育ち、高校教師になってすぐにボランティア活動を始め、教職を定年退職後の現在は高浜漁港横の海釣り公園で監視員を務めながら、日本赤十字社の救助員養成講習の指導員も兼務している。

福井県水難救済会所属の高浜水難救難所としての歴史は浅く10年に満たないが、前身組織である城山水難救護所は昭和43年に発足している。

「当時は、『白浜』『和田』『鳥居浜』『城山』の４つの海水浴場に臨時派出所が設置されるほどの賑わいで、人が増えれば、事故も事件も増えるもんだ。それまで町内でも度々、８つの海水浴場を管轄する公的なボランティア組織設立の必要が叫ばれていた」と班長の今井勇次さん。町内で水道工事会社を経営するかたわら、第八管区海上保安本部の海上安全指導員も務めている。

「会が発足して一番変わったのはボート。それまでは浜で貸し出している手漕ぎボートで救助に向かっていたから、助けられる命も増えた」と、磯部さんが続ける。公的な組織になったことで、日本船舶振興会（現日本財団）からモーターボートの寄付を受けることができたそうだ。

これまで幾多の救助活動を行い、多いときは一日に50人もの海水浴客を助けた経験を持つ磯部さんと今井さんに、印象に残っている救助の話を聞いた。

▲副所長の磯部功さん

▲班長の今井勇次さん

90度、天を差した舳先

「一番記憶に残っている救助となると、やっぱり20年前の『鳥居浜海水浴場』で起こった事故だな」と磯部さん。それに今井さんが頷く。

当時の「鳥居浜海水浴場」は地形的に海が荒れると離岸流が起こりやすかったそうだ。急変した天候に10名程の海水浴客が離岸流で流された。ボートで何とか現場に到着した磯部さんと今井さんだが、海が荒れていてその場で収容するのは危険と判断。磯部さんと今井さんはロープを投げ、幾分波の収まった沖で収容することにした。全員がロープを持ったことを確認し、沖合いへ向かおうとすると、折りしも船の全長の３～４倍もある波が襲ってきた。船が海面から垂直に立つくらいの大波。船にいた二人も、陸から様子も見守っていた他の救助員もその瞬間“ダメだ”と思ったそうだ。

奇跡的に巨大波を越えた船は、計画通り沖合いですべての要救助者を収容することに成功した。

この一件で離岸流の多発エリアには、流れを緩和するため人が立てる深さの潜堤がつくられた。「鳥居浜海水浴場」の沖には、目印としての柱が３本埋め込まれている。

一昨年の最大の事故で発揮されたチームワーク

「最近では、一昨年の『難波江海水浴場』での事故が記憶に残っている」

高浜水難救難所の救助長の秋岡武治さんが語る。秋岡さんの出身は京都。25年程前に高浜町に移住してログハウスペンションを経営するかたわら、趣味のダイビング

▲救助長の秋岡武治さん

▲「白浜海水浴場」の沖合いにある潜堤の目印の石柱

▲「若狭和田海水浴場」の沖合いにある葉積島

がきっかけで、18年前に救助員になった。現在、ダイビングで捜索を行うDSCC班の救助員でもある。

「お盆で帰省していた中学生が波にさらわれた」という救助要請に対し、すぐに高浜水難救難所の救助艇が２艇現場に向かい、海上保安庁と警察のヘリコプターも出動。そうした一大捜索態勢にも関わらず、要救助者収容の一報は届かない。海上保安部と消防署は敦賀と小浜からそれぞれダイビングチームを派遣した。高浜水難救難所のダイビングチームであるDSCC班は陸からサポートに回った。

同じ海にある８つの海水浴場、事故が起こるときは重なるものである。「難波江海水浴場」で捜索が進められるなか、今度は「城山海水浴場」から沖でシュノーケルをしていた若者が溺れたと連絡が入る。

陸にいた救助班が「城山海水浴場」に急行するが、人手も足りない。

「たいがいにして事故が起こるときは海が荒れているもんだから、大きな波を求めてサーファーが集まることも多い」と秋岡さん。事故現場の近くにいたサーファーに、陸から拡声器で指示を出し、救助を手伝ってもらったそうだ。

「この海でさんざん遊んできたからわかる。みんなこの海が好きだから、役に立つことがあれば協力したいんだよ。特にサーファーは、救助に使えるボードを必ず持って沖にいるから、現場が近いときは、助かるんだ」

高浜町ではレジャーダイビングの有志が、昔からボランティアで活動していた。海に車が落ちたときなど、引き上げるロープを車に通したり、そのとき車内に人がいることも何度かあったという。潜水士の資格者の常駐していない地域の消防署をサポートするかたちで、海に潜っていた。その後、消防署でもダイビングチームが編成され、高浜水難救難所のDSCC班は、海上保安部や消防署のダイビングチームのサポート役に回ることが多くなったそうだ。

高浜町に来る海水浴客に、心から楽しんでもらいたい

高浜町の海水浴場では、バーベキューをするのも定番で、夜に営業する海の家もあれば、砂浜で花火もできる。また、車が入れる海水浴場もあれば、「城山海水浴場」には貸しボートがあり、沖合いには葉積島などボートでしか渡れない小島や岩場があったりして、ちょっとした探検気分も味わえる。

高浜町の海水浴場では、他の地域では禁止になっている多くの遊びを行うことができる。危険なことが含まれる遊びを禁止していけば事故は減るが、海水浴客の楽しみも減る。高浜町では地域としての取り組みや、多くの救助員たちの努力を増やすことでこの海の平和を守ろうとしている。

「昔は、臨海学校で高浜町に来た子どもたちが大人になって、家族を連れてまたこの海に遊びに来るというサイクルが確かにあった。だからいっぱい楽しんでいい思い出もたくさん持って帰っていって欲しいんだよ」と磯部さん。

取材日の「城山海水浴場」では、ボランティアによる子ども海遊び教室が行われていて、沖ではパトロール艇が浮かんでいた。この子どもたちもやがて大人になり、この美しい海で遊んだ記憶を思い出し、ここに戻って来るのだろう。

▲「城山海水浴場」の貸しボート

▶「城山海水浴場」で行われた子ども海遊び教室

南越前町 水難救難所

▲河野漁港付近の海にて（左から髙佐信之介救助長、坂下祐二救助長、前川小錦救助員、出倉康憲救助長）

南越前町の豊かな水産資源

南越前町の沖合は、北上する対馬海流と南下するリマン海流がぶつかること良質な漁場が形成されている。そんな南越前町は古くから漁業に力を入れてきた地域であり、町内には３つの漁港がある。

現在は沖合いで行う定置網漁が盛んで、水揚げされる魚のバリエーションは季節によって変わり、どの季節に訪れる観光客の舌をも満足させている。

今回取材した南越前町救難所は、岩倉光弘南越前町長が所長を務め、「糠地区救助班」「甲楽城地区救助班」「河今地区救助班」「大谷地区救助班」の４班に、総勢23名の救助員が所属している。設立は平成21年、救難所としては非常に新しい組織である。

実際の救助の話を聞いた４名も漁業関係者。南越前町で生まれ、目の前の海の恩恵に与り、それを守ってきた人たちだ。彼らの謙遜しながら発した言葉のところどころに、この海を愛する思いと自らに課す使命感が見え隠れしていた。

地域の漁協内で継承される使命感

糠漁港をベースとする「糠地区救助班」からは、高佐信之介救助長と前川小錦救助員。高佐さんは現在69歳。漁協を定年退職後、漁師を経て、現在は旅館業を営んでいる。前川さんは32歳で、漁協に務めている。倍以上歳の離れた二人だがチームワークは抜群だ。通常、南越前町救難所の管轄エリアで事故が起こると、先ず漁協に連絡が入る。その初報を受け取る役目を担当しているのが前川さんなのだ。起こった場所はどこか、救助には何が必要かを瞬時に見極め、どの地区に指示を出せばいいかを判断する。

「この時間だと誰がどこそこの海域にいる、とかはなんとなくわ

▲救助長の髙佐信之介さん

▲救助員の前川小錦さん

▲救助長の坂下祐二さん

▲河野漁港に停泊中の定置網漁船

▲海岸線道路沿いで釣りをする人は多い

かる」という前川さんは、海にいる友だちの漁師に、「近いからちょっと見てきてくれ」と直接電話をすることもあるそうだ。

いわば南越前町水難救難所の“司令塔”である前川さんに救助員たちからの信頼は厚い。

「彼がいるからもう安心だ」という髙佐さんだが、髙佐さんと前川さんが漁協で一緒に働いていた時期は、実は１か月ほどしか被っていない。漁協職員になってほどなく救助員になった前川さんに、髙佐さんは出来上がったばかりの南越前町水難救難所の未来を託すべく、話の通し方や、救助員たちそれぞれのことを教えたという。それから８年が経ち、頼もしい後継者を育てるという髙佐さんの仕事は、もうすでに完結したようだ。

海岸線道路沿いのお食事処が実は前線基地

河野漁港をベースとする「河今地区救助班」からは坂下祐二救助長。漁師を辞めたのが20代半ば、それから40年間、河野漁港の近くで飲食店を営んでいる。この海辺のお食事処は、言うなれば“見張り台”の役割も兼ねているのだ。坂下さんは、目の前の海で何かあれば店の客をよそに現場に向かうこともある。

▲救助長の出倉康憲さん

現在、河野漁港の定置網漁の組合長も務める坂下さんだが、実際に救助の連絡が入ると、場合によっては19ｔほどある定置網漁船で救助に向かうときもあるそうだ。

「大きい船ではいけない岩場とかは別だけど、緊急のときは、伝馬船よりすぐに出港できる定置網漁船の方が都合がいい」

また、南越前町の海岸線道路は海に非常に近い位置にあり、大型のテトラポットが置かれていて、簡単に釣りを楽しむことができる。坂下さんはこれまで何度もテトラポットで起こる、釣り客の事故の救助捜索を行っている。

10年ほど前、道路沿いの旅館から、釣りに出た親子が戻らないと連絡があり、旅館から道路を挟んだところにあるテトラポットの間を隈なく探したそうだ。

「テトラは魚が集まりやすいけど、ちょっとでも濡れていれば滑るし、結構不安定な体制で移動するもんだから、落っこちる釣り客はたまにいる。テトラはコンクリートで出来てるし、落ちたとき頭でも打つと、非常に危険な状況になる」

この10年前の事故のこともあり地域で連携した救助活動を行なえる組織の必用性が求められ、そうして南越前町水難救難所の設立は加速したという。

「釣りバカってのはホントいるね」

甲楽城漁港をベースにする「甲楽城地区救助班」からは、出倉康憲救助長、南越前町水難救難所で一番多くの救助経験を持つ。

「ここら辺の海には釣りのできる小さい岩場が多く、特に渡し船も貸しボートもないから、釣り客はゴムボートなんか持ってきて、磯に上がるんだ」

ゴムボートで岩場に行けば、岩にぶつかって破けることもある。そうして帰れなくなった釣り人を、出倉さんはこれまで何人も迎えに行った。

「一度なんかは定置網の魚入り口でボート釣りをしているのを見かけて、注意しに近寄ったら、ボートが壊れて動けないっていうから、怒るに怒れなくて、引っぱって帰ってやったこともあった。それは生きてたからまだ笑い話だけど、同じパターンで近寄ったらボートに釣り道具しかないこともあった。昔はみんな今ほど救命胴衣を付けてなかったから、落ちると厳しかったな。逆に救命胴衣を付けて流されて、定置網に掴まって救助を待ってるやつもいたな」

南越前町で出倉さんに命を救われた釣り客は少なくないだろう。ときに漁を止めて救助に向かうこともある出倉さんだが、それも「命の問題だから行くしかない」のひと言。「まったく、定置網は釣り場でも避難場所でもないんだよ」とぼやいた出倉さんの声に他の３人が笑う。

ボランティア救助員である海の男たちに共通する、気持ちのいい使命感を南越前町でも感じた。

▲南越前町の海の沖合に浮かぶ定置網のブイ

全国地方救難所のお膝元訪問

ニッポン港グルメ食遊記

観光客の胃袋を満たし疲れを癒す地域の人々にも愛される海辺のお食事処

南越前町の美しい海岸線を走る国道305号線の西側の入り口に、観光客からも地域の人々からも愛される「弁天」がある。河今地区救助班の救助長を務める坂下祐二さんのお店である。

目の前の海で何かあると、最初に坂下さんの店に連絡が入る。坂下さんは南越前町水難救難所が発足するずっと前から、奥様と２人で40年間店を切り盛りしながら、この海を守ってきたのだ。そんな弁天は地域の憩いの場になっている。

地域の人々から人気なのは揚げモノ。特に食べ応え十分の大振りのエビフライ定食が一番とのこと。なかには、メニューに無いフライの盛り合わせを電話で注文して、仕事帰りに持ち帰る常連もいるらしい。

観光客に人気の弁天刺身定食は、その日地元で獲れた魚だけを使用していて、取材日の刺身は“赤鯛”や“イカ”などで、大きな切り身が豪快に盛られていた。フライは“アジ”“スズキ”“キス”など、特にキスのフライは味はもちろんのこと、アジフライと間違えた程の厚みと大きさに驚いた。

今回の取材は７月だったので、６～８月限定のサザエもつぼ焼きで頂いた。養殖モノを出せば年中提供できるサザエだが、弁天では出す時期を区切っている。

「ウチのサザエは小ぶりだが旬の夏しか出してない。どこでも食えるサザエじゃなくて、河野に来たならここのサザエを食ってもらいたいんだよ」と坂下さん。

河野のサザエは身の弾力が違った。キモも嫌な苦味がなく新鮮で、これまで食べたサザエのつぼ焼きとは明らかに違っていた。

これだけ交通網や輸送技術が発達した現在、インターネットでは簡単に地産地消を味わえるとうたっている。しかしそれは似て非なるモノ。その季節にその場所に行かなければ食べられないモノがあることを、弁天で痛感した。

冬には、もちろんメニューに“越前がに”が加わる。弁天は“旬”を食べさせてくれる店である。

①地域の方々に人気のエビフライ定食（1,860円）。
②観光客に一番人気の弁天刺身定食（1,890円）の巨大なキスのフライ。
③サザエのつぼ焼き（1,050円）を食べられるのは６～８月のみ。
④畳敷きの座敷は運転の休憩に最適。

シーサイド 弁天

住　所　福井県南条郡南越前町河野19-16
電　話　0778-48-2048
営業時間　11：00～19：00
定休日　水曜日